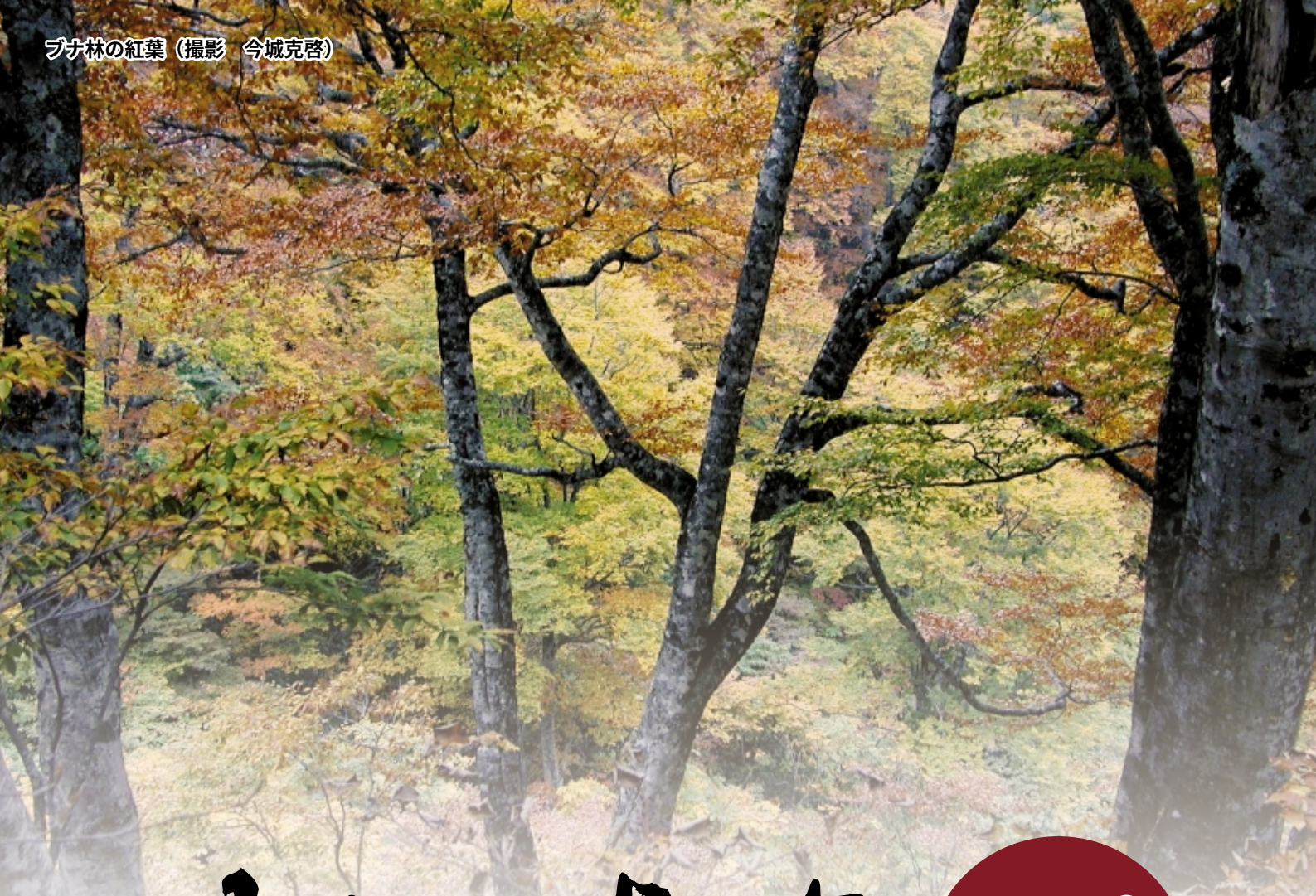


ブナ林の紅葉（撮影　今城克啓）

明日の淡海

Vol.13
2005.11.15発行

自然と人との共生をめざして

Contents

●巻頭言　**自然の保全とは？** …… 2
財団法人滋賀県勤労者福祉協会　事務局長　松井　佐彦（財団法人淡海環境保全財団前理事）

●巻頭特集　琵琶湖条例前夜 …… 3
昭和40年代後半に、滋賀県で起こったせっけん運動を振り返る

●市町村の輪　市町村エコの輪　明日の高島 …… 6
高島市　海東市長 インタビュー

●私の意見評論　**「エコライフ、エコファミリーから美化のエコタウンづくりへ」…随想…提言** …… 8
能登川町　北川　恒雄

●私の仕事　**滋賀県の森林と共に生きる** …… 9
林業技師　今城　克啓

●くらしの特集　明日の生活としての林業 …… 11
栗本　慶一　インタビュー

●県外環境取り組み事例　エコミュージアムはじめよう …… 13
西澤　信雄　インタビュー

●財団活動紹介　**びわ湖ヨシたいまつまつり事業等** …… 17

●滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより　**ブナ林に見る地球温暖化** …… 18

巻頭言
Kan・Tou・Gen

『自然の保全とは？』

財団法人滋賀県勤労者福祉協会 事務局長
松 井 佐 彦（財団法人淡海環境保全財団前理事）

私は、淡海環境保全財団が設立され、琵琶湖の環境に関わる事業を開始したきっかけの一つに、滋賀県がヨシ群落の保全条例を制定してヨシの保全事業に取り組むこととなったことと、具体的な事業体制を敷くことが必要になったことがあったと考えています。縁あって財団の設立から理事として昨年まで運営にも参画させていただきましたが、ヨシ群落からは「自然とは」「保全とは」をいくつも問いかけられた気がします。

一、どちらが自然保全？

ヨシ群落の手入れをしないで放置しておくと、秋に枯れたヨシが倒れ翌春に芽吹くことを繰返してヨシ群落は陸地化し、ヨシは次の浅瀬に群落を増やしていく、つまり自然の営みで言えばヨシは干陸化の象徴だと言われる人があります。

スウェーデンの湖を訪ねたときに、先方の研究者はヨシ群落の面積や水質浄化に関するデータを示してくれましたが、ヨシの手入れについて質問すると怪訝な顔をして「何もしてない。放牧している牛などが湖辺のヨシを食べているが他は自然に伸び自然に枯れている」と答えました。

自然に任せれば当然に波などに洗われて群落が衰退することもあり、ドイツ・ベルリンでは群落を保護する消波柵を設け、波を起こす原因である船舶やモーターボートの速度制限・航行規制を行っていました。滋賀県でもヨシの植栽と定着に苦心しています。

二、ヨシ群落の手入れ

葦簾や葦戸をはじめとする工芸品を生産される業者は、良いヨシを育てるヨシ田を持っておられて、秋に枯れたヨシを刈り取り、冬に焼き払って春の芽吹きを促すという手入れを怠りなくされています。湖辺の自然のヨシも同じ手法でヨシの生育を促しているわけです。しかし、魚類や鳥類の住処としてのヨシを考えると、自然に繁茂した場所が必要です。

「全部を刈って焼き払ったら鳥や魚の住処がなくなる」との質問を受けて、県部長が「虎刈りにします。」と答えた迷答弁が印象に残っています。

三、水質浄化

ヨシ群落が琵琶湖の水質浄化に大きな役割を果たすとされています。確かにヨシ群落が水中の窒素やリンを吸収して水質浄化を果たす機能はもっていますが、琵琶湖の総面積六七〇平方キロメートルに比して、現存するヨシ群落は僅か一三〇ヘクタールに過ぎず、ヨシ群落に琵琶湖の水質浄化まで期待するのは無理に思えます。

しかしながら、ヨシ群落の保全運動は琵琶湖の環境保全運動と一つのシンボル的な運動となっています。淡海環境保全財団は、その名称のとおり、万葉の昔から琵琶湖の原風景を取り戻そうという多くの人々と想いを共有しています。自然保護や環境学習、ボランティア活動の啓発、資源としての活用など、ヨシ保全運動が幅広い自然とのかかわりに発展していくことを願う次第です。

琵琶湖条例前夜

本誌11号12号の特集で、琵琶湖の市民運動である「だきしめてBｉWＡＫＯ」を取り上げました。今号は、１９７０年から１９８０年代初頭に滋賀県で展開された「石けん運動」を取り上げます。この運動も幅広い県民の参加を得て県民運動に発展して、その波紋は全国にまで広がりました。もともとは、合成洗剤が人の健康に影響を及ぼすのではないかとした全国的な運動と琵琶湖の富栄養化問題に直面する滋賀県独自の運動が合わさったものとして展開されました。女性や消費者団体を中心に、琵琶湖の水質と住民の健康を守るために、滋賀県から合成洗剤を追放し、石けんを使用することを目的とするものでした。滋賀県の石けんの使用はジリジリと上昇を続け、１９８０年８月の「滋賀県民意識に関する世論調査」で70％を超えるまでに至りました。１９７７年の琵琶湖の赤潮発生を機に、滋賀県の環境行政と強く結びつき発展し、１９８０年に有リン合成洗剤の販売・使用禁止を含む「滋賀県琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」（琵琶湖条例）制定の支えとなり、社会的にも大きな関心を呼びました。合成洗剤メーカーは反対もありましたが、最終的には、「無リン洗剤の普及」やその後の「より環境にやさしい製品の開発」の流れをつくったといわれています。今号では、日本石鹸洗剤工業会に当時のことを取材しました。

そもそも各地で石けん運動が起こった当時の背景としてあるのは？

昭和30年代から40年代前半くらいまでは、工場水はほとんどが未処理のまま垂れ流しされており、イタイイタイ病とか、水俣病が出ましたね。また、家庭排水の多くも、全国各地の公共用水域、琵琶湖とか瀬戸内海とかにそのまま流れ、水質汚染が激しくなっていました。そしてだんだん環境問題が大きくなってきた。垂れ流しですから排水はすごく汚れている。それで有機物や窒素、リンの濃度が上がって、河川や排水溝から悪臭を発するようになった。

滋賀県でも琵琶湖に赤潮が出ました。この赤潮はカナダやその近くのきれいな湖にたまに出たことがあった種類のプランクトンでした。それが死ぬと生臭い異臭を発する。日本でも、当時は北海道の小さな湖に一度出たくらいです。そのプランクトンがたまたま琵琶湖に出てきた。そして当時、合成洗剤を使い続けることによる環境や安全性に対する不安が、新聞で相当大きく取り上げられていた。その時期が一致したわけです。

そこで武村さん（武村正義氏　当時滋賀県知事）が登場してきた。琵琶湖を守りたい、そういう問題が起こったから。ということで住民にアンケート調査（昭和53年11月）をしました。結果は県民の８割くらいが琵琶湖の環境保全に賛成した。で、やっぱり条例をつくりましょうという形になって、労働団体とか女性や消費者団体がバックアップして、条例制定の動きが活発化してきた。

当時、日本石鹸洗剤工業会としての対処はどうされたのですか。

会長以下、理事たちが県知事とも話し合いを何度もしています。議会も傍聴しました。日本石鹸洗剤工業会は滋賀県に有リン洗剤追放の条項を削るよう要望してます。逆に、県知事から工業会は粉石けんの供給に協力せよと強い要望がなされました。

そこで、当時日本石鹸洗剤工業会の理事が中心になり地元の販売組合といっしょに、当工業会が滋賀県との対応を始めました。Ｄ委員会を結成した、ＤはＤｅｔｅｒｇｅｎｔ（合成洗剤）の頭文字です。琵琶湖の湖畔のホテルに現地本部を作り、そこで東京の本部と連絡を取りながら、いろんな攻防戦をやってきました。当時の報道では「紙爆弾」などと言われましたが、いろいろな種類のチラシを県下にまいたりしました。他にも雑誌とか新聞にもどんどん投稿しました。その結果、滋賀県民から反発もくらいました。「そこまで何でやるんだ」とか。滋賀県の消費者団体からは、現地対策本部に「県外人のお前らは出ていけ」というような電話がかかってもきました。

どうしてそこまでやるのですか。

こういうのはブームですので、放っておくと各地に飛び火して、各地でそういう合理性に疑問のある条例ができて（合成洗剤が）売れなくなるわけです。滋賀県はやっぱり琵琶湖という大きな湖がありますし、よそへの波及効果も高い。しかも国際的には、洗濯機の普及と同時に、石けんも次第にシフトして、合成洗剤に変わっていったという時代背景がございます。それなのに日本の１つの県が、うちの県では合成洗剤は一切ダメで石けんにしましょうという条例をつくったとすると、その県だけ販売しないと言うわけにはいかないんです。県民の方は、県外に行って買って来られることになるでしょうし、メーカーが「売らない」と言ってると、「何であなた方の情報を示してそれを是正しようと動かないんだ」と、あっちこっちから言われることになります。最終的には、私たち工業会としましては、そこまでやったわけです。

すこし四つに組みすぎたかなとも思われます。当時工業会内部でも、放っておいた方がよいという意見もありました。なにか滋賀県の行政や運動を進めている団体にうまく利用されたという感じもします。

リンの問題についてはどう反論されたのですか。

リンの問題に関していえばこの条例ができる前に、業界として合成洗剤の中のリンというのを減らしていく方向にありました。

当時、合成洗剤由来のリンは、わたしたちの試算では琵琶湖に流入するリンの総量の１割前後でした。滋賀県で有リン洗剤の販売、使用を規制しても、まだ９割が残ります。だから洗剤だけ規制しても琵琶湖の水質はそうはよくなりませんと申し上げてたんですが、武村さんは「できるところからやる」と不退転の決意のようでした。

それでその結果どうなったか。琵琶湖の条例ができて20年たって、ちっともよくならないどころか、かえって悪くなった部分もある。

毎年『滋賀の環境』という冊子を滋賀県が出しておられますが、琵琶湖の水質は、ほとんどよくなってない。リンに関しては少しずつですが改善傾向にありますが、窒素は逆に上昇傾向、有機物による汚濁も上昇傾向にあります。（編集部注　リンとＢＯＤは条例後改善された）

ヨシ保全条例がありますが、その効果も大して期待されませんでした。

琵琶湖条例の施行後どうなったんですか。

全国で性能の劣る洗剤を消費者の方が使わざるを得なくなった、なおかつ洗剤の価格が上がったということです。一時的にですが。

それでもメーカーは、やはり常に研究開発しますので、何とか性能を元に戻さなければいけない、もしくはそれ以上のものをつくらなければ他社との競争に勝っていけないことになりますので、ゼオライト（鉱物の一種）というリンの代替物を使って、今日の洗剤ができているわけです。

日本ではリンの法的規制はなかったのですけど、北欧とかアメリカではいろんなリンの規制がありました。日本では私たち工業会が自主的に洗剤への配合量を20％から10％へと段階的に目標を設定して、減らしてきました。

滋賀県の条例ができたから無リン洗剤ができたのではなくて、当時すでに無リン洗剤を各メーカーとも真剣に開発をしていました。メーカーとしては性能低下と、価格の上昇で発売を躊躇していました。でも条例ができれば、全メーカーが無リン洗剤の

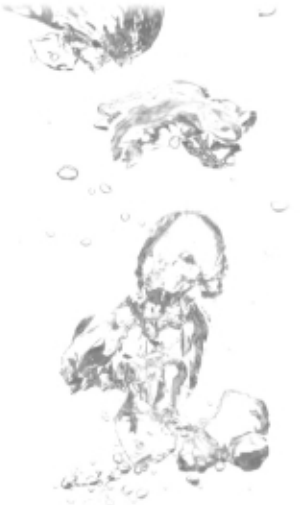
生産を当然やらざるを得ません。

その当時の環境への取り組みは。

まず、主成分についていうと1970年ごろまでは、主成分が微生物によって分解しにくいタイプのものが主流だったので、泡公害なんかが起こったわけです、それを改良しなきゃいけない、やはり水の中にいる微生物が普通に食べて分解して、水と炭酸ガス(二酸化炭素)に変えていけるものにしたわけです。これは1972年までに完了しました。

それから石鹸も合成洗剤も、主成分というのは界面活性剤といって、水と油をなじませる役目をするものですが、これが石鹸の場合には洗濯用は6割とか7割が主成分の界面活性剤、残りが無機物のアルカリ成分です。洗濯のときにはアルカリ性の方が汚れ落ちがいいのです。ところがこの界面活性剤は、有機物でできていますので、有機物汚濁の原因になる。当時、石鹸の場合には3kgの洗濯で使う界面活性剤の量は30g位でしたが、合成洗剤では10g程度でした。

その後、合成洗剤を各社が研究して、いろいろな種類の界面活性剤を組み合わせるなどの工夫をして、何とか洗濯1回当たりの界面活性剤の量を減らしてきました。結果的に1990年代に7g台まで減らして、現在では5g台が多くなっています。



石けん運動のその後はどんな取り組みを?

石けん運動の活発なころは、洗剤の箱はとても大きかった。実は洗濯にお湯を使うのが当たり前の欧米に対して、石けんも合成洗剤も冷水で溶かさなければいけないという日本の特殊事情があり、解けやすいように粒子が中空で、空気が入っていました。水に入れるとすぐ溶けるように作られていました。

1987年、その前後から酵素などを使ったり、それから配合の技術も上がってきたところに、洗剤の粒子に空気が入ってなくても溶ける構造にした、いわゆる「コンパクト洗剤」ができました。今までコップで計っていたのが計量スプーンになりました。

コンパクト洗剤ができる前というのは3kgの洗濯に40グラムの洗剤を使っていたのを、コンパクト洗剤が出たときに25グラムまで減りました。しかし、それまでの洗濯用洗剤というのは、25%の界面活性剤だったのが空気の粒をつぶしてしまったもので、いきなり40%ぐらいまで界面活性剤の濃度が上がってしまった。つまり一回当たりの洗濯に使う界面活性剤の量っていうのは、そのときは変わってなかった。

ところが90年代半ばぐらいから今度はその界面活性剤の量さえ減らす方向にきて、90年代後半になってくると、各社競っていかに少ない界面活性剤で洗濯ができるかというものが多くなってきました。最近は20グラムとか15グラムという洗剤が主流になっています。1回当たりの有機物の量も、87年のさらに半分に減りました。

消費者のかたも、持ち帰りやすいし、洗濯機の周りで場所を取らずに済む。お店にとっても棚スペースがたくさん取れる。それから輸送、保管倉庫にして大きなメリットがある。その上、ごみの排出量も減る、それが現在の状況です。

最後に水がなければ商売ができない、私たちメーカーの立場で言わせていただくと、世界中の洗剤メーカーは、水環境をとても気にかけています。日本でもリスクアセスメントを行っていますが、界面活性剤の濃度が問題になっている地域は、琵琶湖や淀川を含めてまずありませんし、つまり洗剤の排水がなければ水質が大幅によくなるといったことはないと言えます。世界的にも今年夏にOECD(経済協力開発機構)で、洗剤の主要成分のひとつであるLAS(直鎖アルキルベンゼンスルホン酸塩)の、人の健康と環境への影響評価が終了し、問題なしと結論づけられました。

私たちが守るべき環境で今、大切なことは、国内ではゴミの減量と、そして水質では、有機物汚濁をいかに減らしていくかだと思います。有機物は、排出された後で水と炭酸ガスに変わるときに、水の中の酸素を消費しますので、有機物をたくさん出すということは水質汚濁に拍車をかける。ですから一番の有機物であるし尿と、環境省も言ってますけれども、人間の食べ物では、おでんやラーメンの残り汁などは有機物が特に多い。飲み残しのビールとか牛乳なども同じです。そのまま捨てればすごい有機物の量になりますから。

滋賀県民の皆さんには、こういうことも意識してトータルで考えていただきたいですね。

市町村
エコの輪

TAKASHIMA

明日の高島

旧高島郡６町村の合併により誕生し、初代市長に海東英和氏が就任されました。朽木の森林、マキノの里山、新旭のヨシ原など安曇川水系の多くの魅力的な自然の財産があります。しかし、これらの自然環境を保全しながらの地域づくりや産業振興は大変工夫のいるところです。

こういうことを踏まえて海東市長に「明日の高島」をお聞きしました。

本当に地方は豊かになったのか。いや、ある意味ではどんどん貧しくなっているのではないかという、現場での切迫感というものを感じるわけですね。山も荒れているし、獣害もひどいし、琵琶湖に住んでいる生き物を指標にしてみると、かなり危機的な状況が進んでいるように思うし、それをよく考えてみると、全部自分らの暮らしがその結果をつくってきたと思うんです。できれば少し暮らしのベクトルを、地域が豊かになる方向に向きを変えることはできないか。そういうことから、新市のまちづくりのテーマを「環の郷」の実現としました。昔は地域の中のエネルギーをちゃんと使うことによって回っていたわけですからね。

だから、エネルギーのつながりという環もつくりたいし、廃棄物を作らない環というものもつくりたいし…。

これは実験的にやっているんだけど、たとえば地域通貨みたいな、みんなの気持ちを、経済的な一元的な価値観を揺らすような思いを持ってみたいんです。わたしたちが暮らしとともに上手に自然に手を入れていた仕組みを放棄してしまったというか、何も考えんと手放してしまって、経済性に合わないというだけで、それをどんどんとやめていったことを今取り戻そうとし始めているわけですよ。また、県にはヨシ群落保全やプレジャーボート対策など、できれば現場、地域ルールを大事にしてほしいという話をお願いしています。

高島というのは５１１平方キロメートルと広いし、生活圏としても結構閉じた形というか、一体化した部分があるし、資源も、例えば牛が２，０００頭ぐらいいたり、田んぼが３万５，０００反あったり、森林が３５０平方キロあるんですよ。これをそれぞれの方法論で生かし合えるようなことをしたいなと思っていますけど、東京や都市を見て、無い物ねだりをしてきた精神文化から、自分たちの豊かさを「あるもの探し」しながらもう一度確かめて、それを都会の人と共有する中に、経済とか、発展とか、満足とか、そういうものが生まれていくと思います。

針江のヨシ

高島はすごくポテンシャルがあるというか、持っていき方によってはものすごい素晴らしいところになりそうですね。ところで市長は、旧新旭町針江の方だそうですが、針江には琵琶湖屈指のヨシ原があり、地元もヨシで潤った時期があったようですね。

今お話したことからすれば、農業にせよ、ヨシ産業にせよ、それが生業（なりわい）として立つということが最も理想的なことなのですが、この生業が滅びてきたのには１つ理由があるし、滅び

ヨシ刈り

た道というのは文化財とか、伝統工芸みたいな形でないとなかなか成り立っていかないという現実もある。きれい事では何ともいかない部分も。やっぱり今日的な技術も入れたり、行政的な方法論も整えながら、何とかトータルとしての高島を守るということを求めていきたいと思うんです。

高島は自然に触れる部分を、例えば、修学旅行で高島に来てもらうとか、そういうことも含めて。ヨシ刈りのツアーが結構人気なんですよ。今森光彦（写真家）さんが案内して、ヨシ刈りをして、ここで一泊して、コイを刺身にしたり。琵琶湖ホテルさんと共催で、2泊3日で4万3,000円ですよ。あれがわんさか人が来はるんですね。びっくりです。

今までそういう発想はなかったですね。

だから、高島にとってはヨシ刈りというのはオプションなんですよ。雑木林、ヨシ群落、わき水、里山、朽木の山、棚田、いろいろあるので、そういう意味ではラインナップとして必ず並ぶようになってくると、ちょっと注目度も上がるやろうし、ヨシ焼きにカメラマンが300人ぐらい来はりますものね。「ヨシ焼きを見る」ことをJRタイアップ事業で考えているんですよ。ただ、その次につながる面白い話なんですが、このあいだ大阪の菊作りの名人に話を聞いたんですわ。地域の自然を全部凝縮した、つまりその水域のあらゆるミネラルというか、それを含んだ腐葉土や土などが菊作りにええと。たとえば、ヨシ、コナラの落ち葉の腐葉土、畑の豆殻、田んぼの土、山の土。そういうものを使うと素晴らしい菊が出来る。そういえば千利休が完成した日本の美意識の最高峰である茶室。結局、これは全部日本の自然が一体化している空間なんやな。朽木の木材、安曇川の竹、琵琶湖のヨシ、安曇川水系のすべてが、1つにぎゅっと集めた作品、商品。そういうものに流域の自然や宇宙を感じ、最高の価値を感じられたらええな。また、地元のヨシ業者から聞いた話なんですがで、「ヨシは皮をむかないと売れん」という常識を覆して、今まで捨てていたヨシの先のきれいなものを選び「皮付き」という名前で最高級の天井材として売って儲けた。こういうことがすごく大事やと私は思うんですわ。しかしヨシだけを考えているわけじゃなくて、すべて全部総合的に。わたしの知恵だけやなくて、こういう自然の素材を扱う方々が全部集まって何か作れると、いろんな素晴らしいものができるし、多くの生業が育つのではないかなと思っているんです。

話違うんやけど、ヨシ群落の刈り取りでも、最初、一遍真ん中に丸く刈って、そこでみんなで一杯飲んで、こういう話をして、楽しいことをしてから、次に全部刈るとか、してもええねんけど。

そうですね。中に入ったらあったかいなと言うて。次、それ、市長やりましょうか。

上を吹雪がばーっと行っているのに、下は何かぬくうて…。（笑）

豊かな自然もあり、自然と共生する人の営みもあり、大きな夢の高島市に期待すること大です。

環境滋賀　私の意見評論

「エコライフ、エコファミリーから美化のエコタウンづくり」へ…随想…提言

能登川町　北川恒雄

「エコ」という言葉や文字はよく日常生活で見聞いたします。そして、**個人が、家族が、団体が、地域が、会社が、学校が**関心を持ち大なり小なり可能な再生、節約、倹約を実行されています。

私は次の重点対策は、先ず個人、それらの地域集団が取り組むことによって一歩一歩到達するであろうと考えます。以下当面の問題としてピックアップいたします。

●ゴミ減量、ゴミ分別の励行

「捨てればゴミ、生かせば資源」ということで消費者は分別収集に協力しているが、まだまだ大量生産大量消費、過大や過剰包装、必要以上の過剰購入などが主因で安易に放棄する。自治体は処分費用、処理場に苦慮され、利用者負担が間接に高騰している。他方、不法投棄が中には粗大ゴミが河川や堤防、雑草地に散乱し美観を損ね、腐敗、悪臭、汚水の元凶となっている。やがて、それらが循環して人間の健康生活に悪影響を与えている。清浄な空気や清水、土壌や食物に汚染を与えている。昔は空気や水はタダであったが、いまや浄化装置がいる時代となりました。残念ながら、あと2％前後の住民や通行者が守ってくれればいいのですが…効果的な方法は、本人のモラル、自制心になる。

「ポイ捨てが、また良心も捨てている」「ゴミだって　スリムにだして　ちょうだいね」

●公共街灯の点検整備

一隅を照らす街灯は道路の交通安全と防犯に夜間役立っている。ところが照明器具や電球にも寿命があり、中には蛍光灯のグロー球が1分間に何十回と点灯を繰り返している。おそらく夜間何万回となる。それが1週間～2週間続いたり、消灯のまま放置？してある。設置の時は必要性や重要性を強調された結果ようやく設置されたと思うのだが…。また、感知器の不良で夜間も消灯したり、樹木が覆い暗いため昼間も点灯している。定額だから料金は不変だけれども、まさにムダエネであり蛍光灯の点灯何千時間を昼間で消費しているのである。昼間点灯は気づきにくいが設置者管理者は時々点検、付近の住民も通報するなど敏速に修理が望まれる。

●駐車場の美化と駐車禁止・道路の安全確保

いまや自動車の時代、至るところに駐車場あり、管理人不在の駐車場は不潔な部分が多い。例えば側溝は雑草やポイ捨てで詰まったり、汚泥が堆積し、集中豪雨の時などは道路にあふれるのが見られる。また借用者は周囲の散在しているゴミすら「我関せず」管理人の役目と割り切っている。迷惑するのは周囲の住民である。管理人も借用者もいま少し環境美化の意識をもってほしい。

住みよい町づくりの施設や設備、安全対策さらにバリアフリー化はどんどん改善整備されていることは喜ばしい。ここで惜しむらくは、利用者がそれらに対して今少し、ルールやマナー、公衆道徳の順守、愛用、愛護、清潔、美化の底流があれば、エコタウンが維持される。

”来た時よりも美しく“

”立つ鳥跡を濁さず“

”汚すまい　ここはみんなの　くるところ　人が住むところ、行くところ、遊ぶところ、憩うところ、働くところ“

右述のような看板やポスターが不要になるように、各個人のブレーキを利かそう。

滋賀県の森林と共に生きる

「森林」が自然や環境に及ぼす影響が大きいことは、誰でも知っています。しかし、「滋賀県の森林」といって具体的にわたしたちは何を知っているのでしょうか。今号の明日の淡海は多くの企画で森を取り上げ、森林の様子・意義を知っていただきたいと思っています。滋賀県庁の若手の林業技師であり、公私とも森林と関わる今城克啓氏に一文を寄せていただきました。

私は、滋賀県職員として森林・林業に関する業務に携わっています。ここでは、地域の森林・林業を考える一助とするために、管内の湖西地域の奥山にもともと広く分布していた森林を紹介するとともに、現在取り組んでいる、近くの山の木を使った家づくりについてもふれたいと思います。

1 湖西地域に分布する天然スギ・ブナなどの混交林

(1)この森林の姿

湖西地域の中でも特に朽木は山深く、92%もの面積が森林に覆われています。湖西地域の森林も、他の地域と同様、奥山の乱伐にさらされたり、手入れのされない人工林が増えたりしましたが、まだまだ生態的にも資源的にも豊かな森がたくさん存在します。

その中で代表的なのが、太古からこの地域の奥山に存在する、アシウスギと呼ばれる天然のスギと、ブナなどの広葉樹が混交した天然林です。この天然林は、多様な樹種・多様な生物層・多様な樹齢によって構成されていることが特徴で、上層木は樹齢何百年もたっていることがあります。湖西地域の中でも、特に朽木の小入谷の高島市有林には巨木が多く、湖西地域で最も原生的な姿をとどめている森が残っている場所があります。

(2)この森林と人とのかかわり

昔から、山村の人々はこの天然林を暮らしに活用しながら、大事に守ってきました。例えば、アシウスギは、年輪幅が細かいため強度が高く、また木材の色も美しいため、家の材料や調度品として大変価値が高いものです。また、トチの木も、調度品や装飾品の材料として重宝され、朽木盆は古くからの地域の特産品です。

朽木小入谷の高島市有林

天然スギ・ブナなどの混交林の姿

木材としてだけではなく、ブナの枯れ木からでるナメコ・ブナシメジや、ミズナラの大木から出るマイタケ、トチの花からハチが集めたはちみつなども、大変利用価値の高いものです。持続可能な林業や持続可能な暮らし方について、この天然林から学ぶことはとても多いと思われます。

ミズナラから出るマイタケ

トチの花

2 湖西地域の山の木を使った家づくり

(1)自宅づくりにおける試み

湖西地域、特に朽木では、アシウスギの苗木を使った林業が伝統的に行われていたため、アシウスギの特徴を持った良質な木材があります。しかし、木材価格の下落によって、このような良質な木材は家づくりにあまり活用されていないのが現状です。しかし、持続可能な林業や持続可能な暮らしのためには、近くの山の木を無理なく活用した家づくりを普及することが重要だと思います。このため、実験的な意味も込めて、1軒のほとんどの木材を安曇川流域、特に朽木針畑地区のスギで揃えた自宅づくりに取り組んでいます。この家づくりでは、近くの山の木を使うだけでなく、次のことを実行しています。

- 伐採から家づくりまで、林家と一緒にかかわる。
- スギの価値を最大限引き出す使い方を家づくりにかかわるみんなで考える。
- 森にかける負荷を抑えるために、皆伐（すべての木を伐る）はせず、択伐（間引き）による木材を使用する。

伐採は、平成15年2月から始め、今年の4月にほぼすべての木材の製材が完了しました。現在は、製材した木材を倉庫で天然乾燥させているところです。完成は平成18年の秋になる予定ですが、完成すれば是非とも一度参考に見に来てください。

安曇川流域・森と家づくりによる学習会（伐採）

安曇川流域・森と家づくりによる学習会（製材）

(2)地域材活用の普及

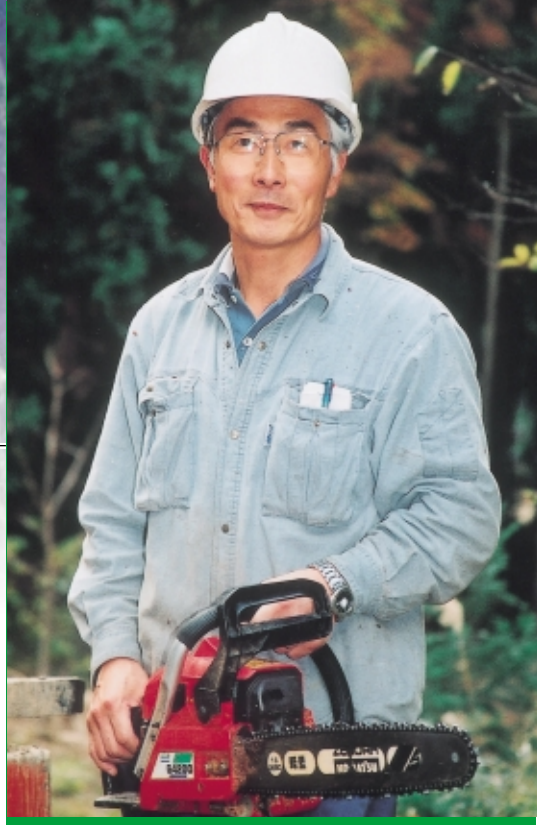
平成16年度に、木材生産者から施工者まで含めた地域材活用のグループ「安曇川流域・森と家づくりの会」が立ち上がりました。当会では、地域材を活用した家づくりや森づくりに関する普及活動を行うとともに、安曇川流域の木材をできるだけ多く家づくりに活用し、そのことによって地域が振興していくための道筋を模索しているところです。

地域材活用が一般的になるためにはまだまだ多くの課題がありますが、会の活動を通して、またいろんな方々の助言をいただきながら、課題をクリアしていきたいと考えています。

くらしの特集

明日の生活としての林業

朽木の天然林



栗本慶一氏のプロフィール

高島市朽木在住　栗本林業代表　家業の林業を引き継ぎ４代目　先祖から引き継いだ約100ヘクタールの山をひとりで守る。人工林を皆伐する方法をやめて、拓伐（部分的に間引くような伐採）や天然スギを１本ずつ活用する方法をとる。

先述の「特集私の仕事」では、滋賀県の森林について説明していただきました。くらしの特集は、さらに滋賀県の森林を理解するために、先祖代々、高島市朽木桑原で林業を営んでこられた栗本林業、栗本慶一さんに、地元の森林、林業とくらしについてお聞かせいただきました。

まず、地元でやってこられた林業について一般の方に分かりやすく説明していただけたらと思います。

栗本　僕は、昭和42年から山の仕事を始めたんです。僕らが林業を始めた頃は、拡大造林とか木材の生産が一番盛んな時期で、特に植林を進めていったんです。そのことによってかなり環境には大きな変化があったように思います。今日までの林業というのは、山から搾取するばっかりで、それを山にあまり返していなかった。だから人工林で返すことだけが山へ返すという意味ではなくて、やはりいろんなかたちで人が山と関わっていかないと、すばらしい環境に反映していかないような気がしますけれど。

理想的にいうと、全部スギとかヒノキにしてしまうとだめでしょうか。

栗本　この地域の広葉樹と針葉樹が混生している森のことを僕ら天然林と呼んでいるんです。結局、天然林の中から昔の人は「必要なものだけを頂いてくる」。そういう環境を壊さないようなかたちで、山を自然な形で循環させていく。そうした体系ができとったのです。針葉樹、広葉樹が混生してるっていうのは、たぶん、ほかの動物にもやさしいやろし、住みやすいやろし、森林の環境としては非常にすばらしいかたちになっているんではないか。やはりその樹齢が違う、樹種がちがう、そういうものが混在してるちゅうことは、森の力としては最高の力を発揮してるんじゃないかなという気はしますね。

前はそれがあったんですか。

栗本　あったんです。今日、僕も反省してみますと、やはり開発をして、一斉に植林するというそういう作業も、それはひとつの林業のかたちとして、すばらしいんです。しかし、木材の価格も安くなり、山で働く人も少なくなってきた今日ですね、できるだけ開発を控えて、コス

※下種更新　自然に落ちた樹木の種が発芽し、自然の競争に勝ち残って成長していく森林の更新の方法

トのかからない林業。もっともっと自然に依存したかたちで天然林を見直しながら、そういうものを手本として開発し、植林もしないといけない。天然下種更新※ですね。できるだけ、手をかけない、施業を目指してですね。たとえばその林道の法面などに天然下種更新で生えた苗を、山へ持っていきますと、そういう苗というのは、林道の法面で育ったものでも苗畑でつくった大きさになるまでに、10年とかそうした年月がかかってます。それだけにやはり、雨季には強いし、しかも、獣害にも、鹿の害とかにも被害に遭いにくいというんです。そういうことも実験的にやってみたらかなり効果もありました。できるだけ自然なかたちのものを、取り入れて、この地域の天然林を見本としてやっていこうという、そういう方針でおりますけど。

今の林業に比べて、昔はほとんど手入れはしなかったんでしょうか。

栗本　そうですね。手入れしないといいますか、炭焼きが盛んな頃にですね。混成している林の中の、広葉樹だけを炭に焼く。そういうかたちのなかで、下がきれいになっていきます。そうしたところに種が落ちて、さらに天然杉が生え上がっていくという、よりよい方向にひとつひとつが向っていったような感じがします。特に、間伐とか、枝打ちとかいう作業はなかったんですけども。順番に大きいのから切っていきますと、下に生えた木がまた日当たりが良くなって、順番に育っていくという。しかも、小さい木は、大きい木に守られて、雪とか風とかの被害にも遭わない。日当たりの少ない分だけ初期の成長がゆっくりしてますので、そのぶんやはり芯から非常に締まったいい木ができる。そうしてよい方向に循環していく気がします。特に特別なことやってきたようではないと思うんですけど。

確かに日本人の生活というのは、天然のものをもってきて上手に家を建てたり、生活に使ったりという、そのものをそのまま利用するというようなとこがありますものね。それで生活というものをやってきたのだから、そういうものがないと、成立してこなかったので。ただ、今からは現代の人に焼き直すなにか工夫というのが必要な感じがするのです。たとえば、斜面から立ち上がってこう這い上がってるそういう根曲がりの材の45度に立ち上がっているその曲がりのカーブと木目が非常にすばらしいものができましてね、これを生かさない方法はない。まったく人の手をかけずに、雪とか、風に耐えてですね自然の力で、杉の木が立ち上がってきたものは非常にこう自然のものには美しさといいますか、たくましさというか力強さを感じますんで。そうしたものもこれからこう使っていただけたら、まったくほかすところはないし、全てが活用できるんで、節の曲がりもですね、生かせるようにがんばっていきたいなと思ってるんですけど。

地元の山を守り、林業で生計を立てることは、かなり難しいことと思います。しかし、こういう方々が地元でがんばり、たくさんの応援者ができる社会にならないものでしょうか。

美しいアシウスギの木目（栗本林業）

通し柱にするスギの伐採（栗本林業）

製材して梁に使用するスギ材（栗本林業）

県外環境取組事例
エコミュージアムはじめよう

「明日の淡海」では、2003年2月発行の8号で、「エコミュージアム」を取り上げました。多くの費用を使わず、ていねいに地元の文化を紹介するやり方は、その後滋賀県でも、「湖国まるごとエコミュージアム」事業が展開されるなど、多くの注目を浴びるようになりました。ただ「エコミュージアム」という言葉が一人歩きしているという感もあります。そこで、本誌ではその原点を見つめ直すため、日本への導入者である山形県朝日町の西澤信雄氏にお話を伺いました。

西澤氏（朝日鉱泉にて）

西澤信雄氏　プロフィール

大津市生まれ。現在山形県朝日町にて「朝日鉱泉」を経営。日本ネイチャーゲーム協会専務理事。その他山形県や朝日町の各委員を歴任。日本で初めてエコミュージアムを朝日町に導入する。

大人が知ったり体験したりすること

そもそもエコミュージアムを導入されたきっかけは

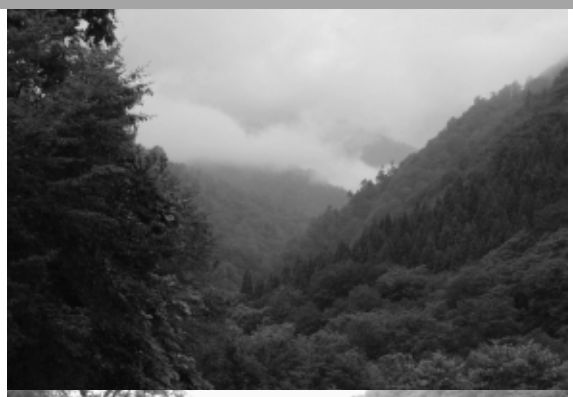
（大学を出て、朝日町へ来て）今でいう自然観察教室、「ナチュラリストクラブ」を作ったんだね。20年くらい前ですね。子どもたちと自然を見に行ったりとか、機織りや炭焼きとかあったんでそれを見に行ったり、（そうするうちに）これは子どもが体験する以上に、大人が知ったり体験したりすることが必要ではないかなと（思っている時に）ある千葉の博物館の学芸員の人に会いました。これは子どもが体験するしくみではなくて、大人が自分たちの地域を体験するしくみにするべきではないかなと話したら、ごく最近よく似た話を聞いてそれが「エコミュージアム」だと教えてもらったのです。はじめて「エコミュージアム」を聞いた時は、エコロジーとミュージアムだからたいへんよい言葉だなと思いました。次に平塚の博物館の人が、新井重三先生（博物館学）の論文を送ってくれた。それは自分の考えていることと同じで、しかもフランスで行われていることで、そこに「ジョルジュ・アンリー・リビェール（仏）」のエコミュージアムのことが載っていたんだね。

立派でなくてもいい

フランスにほんまもんを見ようと行ってみたら、展示が非常にシンプルで、中学校の文化祭という程度の展示だったから、あの論文にあったように「見せ方を立派にする」と、「見る人も立派な人しか見なくなる」ということなんだな。「これはだれが作ったんですか」と聞いたら、地元の人が作っているということだった。「作っているところを見せてくれませんか」と言ったら、「二階で日曜日になったら近所の人が来て作ってるんだ」ということで、それももう楽屋みたいなもんでした。ああこれでいいんだと思って自信もって帰ってきて、新井先生とコンタクトとったんですよ。「先生の論文見てフランスに行ってきた」と言ったら、「えー、エコミージアムをエコミュージアムするためにフランスに

エコミュージアムとは

1960年代にフランスで提唱された新しい博物館の考え方。ひとつの大きな博物館施設に様々な展示品を持つということではなく、いくつかの「サテライト」と言われる施設や場所で見学者にＰＲし、「コア」と呼ばれる各サテライトの紹介をする施設が存在します。小さな地区単位でもできますし、滋賀県のような全県にまたがる広域的な取り組みもできるようです。



雲の中の大朝日岳

朝日鉱泉付近の渓流

見に行った人は君が初めてじゃないの。まだぼくも見てないんだから。」とびっくりされたんです。新井先生すごくいい人で、朝日町に来てくれていろいろな話をしてくれました。ただまったく情報がない頃で、フランス向こうでもらってきたパンフレットとか、訳したりして、だんだん形づくっていったんだ。あの人だったらわかるだろうという人をピックアップしてエコミュージアム研究会を作って、毎月一度ずっと何年も集まったな。

地元にもニーズはあったんですか。

あったんだと思いますね。地元に阿部宗一郎さんがいて、町民憲章を創るなど様々な活動されたえらい方で、朝日町の基本構想をつくるという機会があり、私もメンバーに入ったです。その方もメンバーにいたんです。基本構想委員会なんてものは、普通は形式的で本格的な話をしないんですね。でもその人と口論になって、三十代だったからな。「おかしいよ。地元のものを見直して、地元のものを生かして、やっていかないとダメじゃない。」なんて話したんです。

若くて、よそものなのに生意気だったんですね。

ただこの町がたいへん社会教育のすすんだ町だということは、はじめに聞きましたね。なるだけ民間人いれてなんとかしようとか。いろいろなことを民間に主体的にやらしてあげようとか。そういうことがベースにあったかもしれないね。役場の職員だけですべてやろうというのではなかった気がするね。

ネットワークとしてのエコミュージアム

ところで、どうしてフランスで広がったんでしょうか。

エコミュージアムの考え方は、反権力の考え方なんですよ。自分が自然保護運動とかやってましたから、そういう感覚があったんでしょうね。中央集権に反対するのが思想のベースになっていますから、なにもかも画一化して、中央に集めたりしない。コア（中核施設）が中心ではなくて、サテライトが中心なんです。サテライトはフランスでは、「アンテナ」というのですが、まさにアンテナなんですよ。それがエコミュージアムの中でどうなっているかというと、中央集権的ではないので、いくつかのサテライトの持っている力がおのおの動くことによって、一点集中ではなく多点集中で地域の問題を解決するという理論でなりたっていることがすごいんだと思うんです。そこにいる人が自分の持ち場を守ればいいんであって、いきなり行政がここがコアだといってくっつけてもよくない。つまりネットワークなんですよね。ネットワークとしてエコミュージアムがあるんであって、中央とサテライトという関係ではないですよね。コアから指令がいくというのは錯覚じゃないかな。

地元のお年寄りの話を聞くのが好き

なぜ、そういうことに思いついたかというと、伏線があって、こちらに住んでから年寄りの話を聞くのが好きで、自分自身としては本を書いた関係があって、山関係の人、鉄砲打ち関係の人に、十人とか十五人とかに話を聞いていた。そういう人は行ってみるととても親切で、話をしたがっているというのがはっきりわかったし、テープ取っても抵抗ないし、冬だったらみんな暇だし、すごく親切に話してくれて、それもみんな自分の知らないことばっかしで、こちらの知識が増えるにしたがって相手の話す量も増えてくる。となりの町に、語り部のような人がひとりいて記憶がよくって山の猟や山仕事の話をしてくれました。二泊三日ぐらいで真冬に何回も行ったんだよね。（この人の話は一冊の本になりました「朝日連峰の狩人」山と渓谷社）学者の言っていることは、机の上の話であって、地元のことは地元の人がよく知っているんだ。「りんごは大学の農学部の先生が知っている

のではなく、生産者がよく知っている。」のたとえで、山のことを言えば、山で生活している人が知っているな。私はよそから来たから、まわりで山菜とったりすることをまったく知らなかったから、そういうことを教えてもらうことがうそみたいに面白かったし、どんどん多くの人達に話を聞いてたから、エコミュージアムの考え方の中にそういう言葉が出てくると、うれしかった。

ある程度の町の中にそういう人が何人もいる、表現してもいいものがいっぱいある。エコミュージアムの文献の最初に書いてあった言葉が、あまりにも的確ですごくびっくりしたです。どうしてこういうことをこの人たちは考えたんだろうなと。「住民が熱意とアイデアを出し、行政が資材を出す。」まったくそのとおりだと思った。私は自然保護に関しては何十年と勉強しているわけですから、行政の人は三年四年ぐらいで、対応すると明らかに差があるわけですよね。行政の人は自分たちがプランを作る立場なんだという錯覚におちいってるんだけど、本当は住民が自分達の地域のプランを作る能力があるのだ。エコミュージアムは住民の心を写す鏡だといってる。まさにそのとおりなんだよね。住民が学芸員だというのもわかるしね。よそから見学に来た人は話を聞かせてもらう人なんだ。多くのフレーズがすべて瞬時に理解できたというか、ああこれだと納得した。

地元の人が地元のことを

朝日町でも、今度はなるべく若い人がやらにゃいかんということで、安藤くん(安藤竜二氏　特定非営利活動法人朝日町エコミュージアム協会代表)が中心になってがんばっている。理事会とかは出るんだけどなるべく関わらないようにしている。彼らのサポートをしようと思ってるんだけど。基本的に行政がいつも正しいと思っている人にはこういう活動はなかなかできないと思う。それはまちがいないと思う。基本的に行政から補助金もろてやろうと思てる人には無理ですね。役場の職員なんかもいて、エコミュージアムは実は役場のおかげで出来ていると思っている。それが間違いのもとだ。

私は大津で生まれて高校卒業まで大津で育ちました。大学を出て26才で朝日町に来ましたので、一番こわいのは、どこかへ講演に行ってエコミュージアムを理解してくれたと思った時、最後に、致命傷をいわれるのはつらい。「西澤さんは、よそからこられたんですよね。」そうすると今まで話したことがひっくり返ってしまうんですよ。安藤くんに言ってるんだけど、僕が関わってもいいんだけど、「朝日町のエコミュージアムはよその人に創られたといわれてしまうよ。」「地元の人が、地元を知らないと、地元はよくならないんだ。」どうみたって。だから、地元の人がちゃんとやる。安藤くんなんかは優秀ですからね。地元で生まれて地元で育ってるのに、センスは地元の人を突き抜けてるし、彼なんかの話の方がつくづく説得力あるよな。民間であっても、どれだけ町作りに対する意志を持てるかということを、行政なんか何するものぞというか。その点彼はすばらしい。

大沼の浮島案内版

朝日町サテライトのひとつ大沼の浮島

将来の日本とエコミュージアム

私は、はじめからエコミュージアムの考え方、将来日本はこれしかやっていけないと思いましたよ。まちがいない。今までは、個人個人の隙間を行政が高い金を負担し埋めていたんだけど、これからは個人が埋めなきゃいけない。それをボランティアといってはいけない。生活のために手助けする。子どもが動けば大人は手助けをする。それをボランティアといってしまうと、それは生活というものから離れたレベルになってしまう。祭りに参加するおじさんたち、神社の氏子なんて人達は、ボランティアとは思ってないんじゃないかな。それをボランティアという言葉に置き換えるとよくない。まさに「エコミュージアム」という言葉はそういうことなんだけどね。

安藤君のおじいちゃんがなくなった時、そのテープをお葬式の時に渡したんだよね。そうすると安藤君自身が感動したんだよね。安藤君はおじいさんが山の生活を楽しそうに語っているのをはじめて聞いた。おじいさんは聞いてくれる人がなかったから語らなかったんだよね。なんていうかな。そこがエコミュージアムということなんだよな。なんでもない事実が、ほっといたら、なんでもなく流れていくんだけど、ある人が意図的にすくいあげるとか、意図的に残るしくみ、ほかに伝えていくしくみを作るのが、エコミュージアムじゃないかな。

ミュージアムは簡単に、ひとつでいい。

既存の博物館についてはいかがですか。

確かに琵琶湖博物館の中を見ると、さすがに博物館としては進んでるし、最先端の展示をしているのはまちがいない。焦点の当て方なんかすばらしいと思う。でもこういう知識とかそういうのは一気に伝えたら忘れてしまうということかもしれない。なにもかも自分のところにはたくさん宝があるから、全部紹介したれというのはダメで。たとえば一個のサテライトを一日かけてゆっくり見るとか、そうしていくもんでしょうね。どうしてもサテライトが五つあれば、転々としてしまうからね。博物館でもそうだね。入ったら全館みてしまうね。そんな莫大な量の知識が半日で理解されたら、たまったもんじゃないと創った人は思ってるんじゃないかね。でも今までの日本の博物館はそうできていたということは、いいとこでもあり、悪いとこでもあったんですよね。こないだイタリアへ女房と一緒に旅行して美術館めぐりをして、はっと気がついたんだけど、普通はそういう美術館で、順番に美術品を見て「ルネッサンスはどうだ」とか「歴史がこうだったんだ」とか理解しようとするじゃない。あれが根本的なわれわれの知識の吸収の仕方のミステークなんですね。女房が一言「ここの美術館はこの絵だけ見ればいいのね。」といって、目が覚めた。そうなんだよ。そんなにたくさん理解できないよ。博物館で全部観るとかは、本当は変なんですよね。なにもかも寄せ集めた博物館を造り、5時間で観てくれというのはおかしい。琵琶湖期博物館だって昔の家の前だけで一日いたほうがよっほど理解できるんだ。小中学生が博物館に行って早周りするんではなく、何度も目的に応じて訪問できれば一番いい。特に琵琶湖博物館には。エコミュージアムもそうだね。コアに資料を集中し、コアだけ観るのはよくない。サテライトを一日かけてじっくり観る。ほんとうにゆっくり博物館に滞在できるようになってきたら、いいことになるんじゃないですか。

西澤さんは、大津の出身ですが、大津の時の思い出はありますか。

大津のよさってなんだろう。歴史がごろごろがっているね。でも、さっきの話と同じ、人は結局いろいろなものが散らばっていても、一個なんでしょうね。私にとっては今でもたまに大津に帰って仲町商店街を通って想い出すのは、昔はなやかだった頃、夏にあそこを歩いて、あずきの氷菓子が氷の上に置いてある水羊羹みたいなもの、それが買ってほしかったけどとうとう買ってもらえなかったということ。それを今でもあそこ通ると想い出すね。でも、いい子ども時代を送った。正月も夏休みも楽しかったし、正月にお年玉もらって仲町商店街でいろいろ買った。あそこにすべてがあった。そこが私の銀座だった。もちろん琵琶湖で泳いだり釣りをしたりした思い出も大きいけど仲町商店街の思いでは忘れられないね。ふと想い出すのはそういう風景だね。

エコミュージアムに関わってから、町づくりがんばっているところを、あちこちいっぱい見に行きましたよ。自費でも行ったし、呼ばれていったし、町の金でも行きました。ただどこの街いっても共通点みたいなところがあったけど、大津には川がないんだよ。湖はあるんだけどね。たいていうまく行っているところには川があるんだよ。どこのいい街いっても、川があって、合流点があって、しかもそこに城がある。風水なんだよね。膳所城は琵琶湖のほとりで(位置関係は違う)、でも三井寺とか比叡山がそういう位置関係にあるのかなという感じがしますね。そういえば小さい頃は、三井寺あまりこわくって入れなかったよね。私の生まれたのは新町といってね。新町のこどもは、不思議なことに新町の子としか遊ばない。祭りの組織も町単位で、大津市一体ということがあまりないところだったね。

そういう意味で大津は沢山の町、コアのないサテライトの集合体かもしれませんね。

もう少ししたら大津に住んで一つ一つの町(サテライト)をゆっくり廻って楽しみたいと思います。

財団活動紹介

本年度も当財団では、琵琶湖の環境保全を中心に様々な事業を実施しています。
今号では、10月までに行われた主な事業をご紹介します。

5月

湖底改善・生産力向上事業

南湖でのシジミ漁場の復活を図るため、シジミ掻き用の鉄鍬により水草除去および湖底耕耘を行う事業です。

7月～10月

省エネ・お得ポイント事業

省エネ（節電）に取り組むグループを募集し、そのメンバーの各家庭の節電実績に応じてグループに活動支援金を支給し応援する事業です。

6月～10月

ヨシ地域協働型学習会事業

県下６つの小学校でヨシ学習会を行っています。今年は主に４年生の児童がヨシについて学び、校内でヨシを栽培しています。秋には琵琶湖へ植えにいく予定です。

7月～8月

ノーリリースありがとう券事業

ブラックバスやブルーギル（外来魚）を指定店に持ち込めば、ありがとう券（金券）と交換するという事業です。昨年度に引き続き、多くの人々が外来魚を持ち込んでくださいました。「琵琶湖ルール」の定着を目的として８月31日まで実施し、約11トンの外来魚を駆除することができました。

8月

びわ湖ヨシたいまつまつり事業

冬に刈り取ったヨシなどを使い、琵琶湖の恵みに感謝するという「びわ湖ヨシたいまつまつり」が８月27日に琵琶湖周辺の8会場で行われ、約３万人の人が参加して、去りゆく夏を惜しみました。

8月

お～みＥＣＯくらぶ体験教室事業

大津市雄琴で、家族で夏の琵琶湖を体験しました。
カヌー教室で琵琶湖を満喫したり、ヨシ笛づくりやヨシ苗植えなど楽しく有意義な夏の日を過ごしました。

滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより

ブナ林に見る地球温暖化

平成17年2月に京都議定書が発効され、「地球温暖化」はますます大きな課題となっています。～ストップ！地球温暖化　私たちに出来ることから始めましょう～

1、ブナ林は命を育む森

ブナ林と聞くと、皆さんはどんなイメージを思い浮かべますか？

高原、避暑地、豊かな森、野鳥の鳴き声…白神山地が有名な東北地方や長野県などを思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。

ブナの分布域は東北や中部など東日本にかたよってはいますが、実は、北海道南部から九州に至るまでほぼ全国に及んでおり、私たちの身近なところにも存在しています。滋賀県では、湖北と湖西、鈴鹿山脈に約60㎢ものブナ林が分布しています。

ブナは冷温帯の代表的な落葉広葉樹の一種で、平均気温が6℃～13℃、降水量が1200mm以上と涼しくて降水量の多い地域に生息し、大型動物のすみかにもなる豊かな森林を形成します。

ブナ林は「緑のダム」と言われることがあります。それはブナの大木が1本で、春に約50～60万枚も茂らせ秋には落葉した葉が、土の上に厚い腐葉土層をつくり、約8tもの水を貯めることが出来るためです。ブナ林に貯められた水は、地上に湧き出て川となり、滋賀県であれば琵琶湖に注がれます。ブナ林は動物や私たちを潤してくれる水の源であると言えるでしょう。

ブナの巨木

また、ブナ林はたくさんの実をつけ、ツキノワグマなど大型動物まで養うことの出来る森の動物の「食物の宝庫」となり、「すみか」となります。杉は1000年生きることが出来ますが、ブナは200～300年が寿命であると言われています。ブナは、幹内の含水量が多く腐りやすいという性質を持っている為、老木になると中が空洞になり、ツキノワグマなどの大型動物が冬眠するには絶好の場所となるのです。

寿命が尽きたブナは台風や雪によって倒木し、キノコなどの菌類によって分解されます。倒木した木には、幹にも株にもびっしりとナメコなどのキノコが生え、1本で10キロ以上のキノコが採れることも珍しくありません。そして、分解され土のように柔らかくなった幹には、ブナの種が落ち発芽します。芽は、シカなど動物の食料となりますが、それを免れた芽は成長し大木となります。

こうしてブナは、生から死へ生涯を通して「緑のダム」となり「食料」となり「すみか」となって、たくさんの命を育みながら森を形成していくのです。

2、ブナ林に何が起こっているか。

環境省が発行している「STOP THE 温暖化2005」の中の「温暖化のもたらす深刻な影響(4)」によると、温暖化が進み気温が3・6℃上昇した場合、ブナ林の分布可能域は約90％消失すると予測されています。滋賀県では、気温が2℃上昇するとブナ林の分布可能域がなくなってしまう可能性があります。ある新聞記者の方からは、「最近、滋賀のブナの芽が出ないらしい。」と聞きました。何故芽が出ないのか…。温暖化が原因なのか。私は、高島県事務所の林業職員さんにご同行いただき、滋賀県高島市朽木生杉から京都府美山町芦生にかけて、実際にブナ林を観察してみることにしました。

その日は朝から暑い日で、朽木の温度計を見ると29度もありました。お昼には30度を越えていたようです。地元の方の話では、「昔は30度を超える日はなかったのに、何年か前から越える日が出てきた」と言います。

ブナの倒木

ブナ林に入っていくと、少しずつ異変に気づき始めました。まず、「下草がない」ことです。木間が大きく、太陽の光が入ってくる理想的な林であるのに下草があまり生えてないのです。林業職員さんに「何故」か聞くと「シカの数が増え、下草が食べ尽くされているから」との答えが返ってきました。以前、冬にはたくさんの雪が降り、厳しい寒さのため越冬出来るシカは限られていました。けれども現在では、雪の量が減り、冬の寒さも緩和されてきたため、シカが冬を越せるようになってきたのです。シカは、木の実や新芽も食べてしまうので、新しいブナは育ちにくくなっています。「ブナの芽が出ないらしい」という新聞記者の話の真相は、このような理由によるものでした。

さらにブナ林を奥に進んでいくと、かなりの数の倒木が目につきます。ブナは倒木し、そこから芽吹いて成長していくという循環をしますが、林業職員さんは「倒木の数が多すぎる」と言います。何故、こんなに木が倒れるのかというと、台風のせいというのもありますが、実は、雪が原因だと言われています。皆さんは「雪は少なくなってきてるのに何故」と思われることでしょう。確かに、雪は減少しているのですが、気温が高くなってきたため、さらさらだった雪質が水分の多い重くべたべたする雪に変化してしまい、ブナの枝にくっついてその重みで倒木してしまうのです。

このように倒木が進み、芽が育たなければ、ブナ林は本当に無くなってしまうかもしれないと私は痛切に感じました。山の奥深くに静かに佇み、動物や私たちにいろんな恵みを与えてくれるブナ林は、今、人間の引き起こした地球温暖化の影響を受けています。

ブナの実

帰りに、ブナの木にたくさんの木の実がついているのを発見しました。林業職員さんによると、「こんな車道に面したところで見つけられることは珍しく幸運なこと」なのだそうです。今年は4年に1度という豊作の年であるとのこと。ブナは子孫を残すために、「豊作の年にはきちんと実をつける」という使命を一生懸命に果しています。私たちも子供たちのために、身の回りの出来ることから始めませんか。

滋賀県地球温暖化防止活動推進センター
職員　森口　友美子

明日の淡海 Vol.13
2005.11.15発行
発行 財団法人 淡海環境保全財団

〒520-0807 大津市松本1丁目2番1号 大津合同庁舎内
TEL：077-524-7168 FAX：077-524-7178
E-mail：info@ohmi.or.jp URL http：//www.ohmi.or.jp

編／集／後／記

今号はブナ林などの森林を考える特集が多くなりました。琵琶湖の水に大きな影響を及ぼす「森」についても理解を深めましょう。

原稿の募集について

機関紙「明日の淡海」では、環境や自然に関心のある方々の意見・提言などを募集しています。

環境問題に対する考え方や環境施策への意見・提言等
環境に優しい暮らしにつながる意見・提言等
美しい自然や自然保護に対する意見・提言等

※採用分には薄謝進呈
※当財団まで郵送かメールまたはFAXでお送りください。

PRINTED WITH SOY INK
R100
GPN Green Purchasing Network
本誌は、環境や資源の有効活用に配慮した印刷物です